

文章の読みに困難のある児童・生徒に対する支援方法に関する検討

支援教材の開発とその有効性について

所属校：荒川区立第九中学校

氏名：高橋恵美子

派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：特別支援教育・発達性読み障害・ひらがな読み支援・視覚性語彙

研究の目的

1 特別支援教育における学習支援教材の必要性

平成15年3月、文部科学省が「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」を示し、「『特殊教育』から『特別支援教育』への転換を図る」と提言して以来、各自治体や小中学校において特別支援教育が推進され、支援体制も構築されつつある。しかし、各障害の特性に応じた具体的な支援方法が充実するまでには、さらに時間を要するであろう。支援方法の開発は急務であるといえる。

2 発達性読み障害

全般的な知的発達に遅れがないのに読みの習得に困難を示すことは、発達性読み障害と言われ、我が国では、LD(学習障害)のサブタイプとして考えられている。そして、発達性読み障害の要因として、音韻意識を含めた音韻処理の問題が大きく取り上げられている(細川 2006)。読みの習得に困難を示す児童・生徒は教科書を読むことができず、学習をする上で、深刻な困難に直面している。発達性読み障害の児童・生徒のための支援教材の開発は急がれるべきである。

3 視覚性語彙

後藤ら(2007)は、有意味単語と無意味単語の音読課題(瞬間提示単語命名課題)を実施して読み処理の発達について検討を行い、小学校1年生から3年生では視覚性語彙を用いて読み処理の効率が高められることを指摘した。視覚性語彙とは、発音手続きに頼らずに読んで理解できる単語のレパートリーである。(小池ら、2003)。

4 本研究の目的

特別支援教育の学校現場では、具体的な支援方法の開発が急務であり、特に発達性読み障害を有する児童・生徒に対して読み改善をもたらす教材の開発は、急がれるべきである。本研究では、ひらがな文の読みに著しい困難を示すLD児を対象としたひらがな読み支援において、読み改善をもたらす読み支援教材を開発し(検討1)、開発した読み支援教材を用いて行った読み困難児の指導場面における、ひらがな単語読みの変化とひらがな文読みの変化について検討し(検討2)。

それに基づき、読み困難児に対する学習支援のあり方について考察することを目的とする。この読み支援教材では、読み処理の効率が高められると指摘された視覚性語彙の形成による読み支援と、現在、指導場面で用いられることが多い行読みの支援を、支援方法の主なものとする。

研究の方法

1 教科書の読みに関する支援教材の開発(検討1)

(1) 支援教材の方向性

読みに困難を抱え、教科書を読むことに困窮する多くの児童・生徒を支援するため、本教材では、教科書を題材にした読み支援教材を作成した。それを用いて、個別指導場面にて読むことを支援し、読みの困難を抱えた児童・生徒の教室場面における学習支援につなげることを意図した。教科書の利用については、読みに困難のある児童・生徒が、自身の所持する教科書を使用する、という前提で考えた。また、本教材は、教科書のみならず、その児童・生徒が読みを獲得する必要がある文章を、必要に応じて組み込むことができる。

(2) 研究の方法

教科書の教材を選定し、ファイル化した。

瞬間提示単語課題を作成した。

単語検索課題を作成した。

行読み課題を作成した。

コンピューター呈示教材を作成した。

2 支援読み教材の使用と効果に関する検討(検討2)

(1) 目的と対象児・・・検討1で開発した読み支援教材の指導課題を、読み書きに著しい困難を示す小学校2年生(指導開始時1年生)の男児(以後、A児と表記)に対して実施し、その指導経過におけるひらがな文読みとひらがな単語読みの変化から、支援教材の有効性について検討を行うことを目的とする。

(2) 手続き

指導期間、場所、形態・・・平成19年3月から7月、大学内の研究室にて、あるいは大学の附属施設にて、一対一の個別指導の形態で指導を行った。

指導の3条件・・・視覚性語彙指導条件、行読み指導条件、指導なし条件の3つの条件を設けて、各条件の指導の経過を記録した。

読み支援教材における指導材料・・・小学1年生の国語の教科書を参考にした動物の説明文を、各条件ごとに3つ作成し、読み支援教材の指導材料とした。各文章は特殊音節のないひらがな文字のみで書かれており、各文章の文字数はほぼ同じであった。

指導の手順・・・上記3条件の読み支援教材の各指導を行い、各条件における、指導前の3回、指導3回後、指導6回後、保持の各時点の合計6回、説明文音読課題を行い、ひらがな文読みの反応時間と誤読数の変化を記録した。

トークンテスト指示文音読課題と瞬間提示単語命名課題・・・指導前と指導後に、トークンテスト指示文音読課題(葛西ら2006)、瞬間提示単語命名課題(後藤ら2007)を実施し、指導前と指導後のトークンテスト指示文音読課題の読みに要した総時間、瞬間提示単語命名課題の反応時間と誤読数を記録した。

研究の結果

1 教科書の読みに関する支援教材の開発(検討1)

視覚性語彙指導条件では、瞬間提示単語課題、単語検索課題の2課題、行読み指導条件では行読み課題の、合計3種類の課題を作成した。

瞬間提示単語課題とは、コンピューター画面上の「カード指導」をクリックすると、文章中に出てくる、指導単語がフラッシュ提示され、繰り返し視覚提示して読ませる指導を行うことができる。提示時間が調整できるため、児童・生徒の注意・集中の状態に応じて学習させることが可能である。

単語検索課題とは、無意味語のひらがな文字列の中に、文章中に出てくる指導単語を入れておき、提示されたその文字列の中から指導単語を探し出す、という課題である。単語の最初の文字と最後の文字をクリックし、正解である場合に音楽が、誤答である場合にはブザー音が、それぞれ鳴りようになっている。上記の瞬間提示単語課題と連動して、視覚性語彙の形成を促す教材である。

行読み課題とは、行間の読み誤りをなくすことを目指した指導である。この指導では、以下の二通りの提示のしかたを用意した。文章に線をつける提示方法と、今読んでいる行以外は、覆って隠してしまう提示方法

である。当該児童・生徒に、好みの提示方法を選んでもらえるようにした。

2 支援読み教材の使用と効果に関する検討(検討2)

(1) 指導課題の指導期における変化・・・瞬間提示単語課題における指導期の誤読総数とその推移、助詞の誤読・脱落の総数では、誤読総数が減少し、助詞の誤読・脱落の総数にも、減少傾向が見られた。単語検索課題における指導期の課題に要した総時間は減少していた。行読みの指導課題の指導期では、読みに要した総時間、誤読総数、助詞の誤読数ともに減少した。

(2) 各条件における説明文音読課題について

視覚性語彙形成条件の説明文音読課題の成績で、読みに要した総反応時間は指導後に減少していた。行読み指導条件では、読みに要した総時間、誤読総数ともに、減少が見られた。

指導なし条件では、読みに要した総時間、誤読総数ともに減少しているのが認められた。

(3) トークンテスト指示文音読課題、瞬間提示単語命名課題について

トークンテスト指示文音読課題の指導前、指導後における読みに要した総時間では、指導前と比較して、指導後における読みに要した総時間は約3分の2程度に減少した。瞬間提示単語命名課題では、1文字条件と2文字有意味語条件で、指導前と比較して指導後において、反応時間と誤読数の減少が認められた。

考察

A児における、瞬間提示単語課題、単語検索課題、行読みの指導課題の成績の推移、各条件における説明文音読課題の結果をみると、その誤読総数と読みの総反応時間の減少が確認できる。このことから、A児に対しては、ひらがな読み支援の方法として、視覚性語彙の指導、行読みの指導ともに、有効性が確認されたといえる。指導なし条件においても誤読総数と読みの総反応時間の減少が確認できることから、指導していない文章においても、読みが向上している、といえる。

次にA児のトークンテスト指示文音読課題、瞬間提示単語命名課題では、トークンテスト指示文音読課題において指導後における読みに要した総時間は約3分の2程度に減少し、瞬間提示単語命名課題では、1文字条件と2文字有意味語条件の指導前と指導後において、反応時間と誤読数の減少が認められた。よって、ひらがな読み支援の指導課題によって指導を行う中で、A児の語彙処理がより機能するようになり、それにより読み処理の効率化が行われたと考えられる。